

Principal Correspondence

感動を伴う体験活動を

20年以上経験のある医者，教師，ドライバーは5年しか経験の無い人より，やや技能が劣っている（「超一流になるのは才能か努力か？」（アンダース エリクソン・文芸春秋）。という本を読みつくづく考えさせられました。

一般に何かが許容できるパフォーマンスレベルに達し自然に出来るようになる（つまりコンフォートゾーンで全く同じやり方で同じ繰り返しでも）停滞し，むしろ穏やかな能力低下は避けられないというのです。確かに私は，毎日運転していますが運転をうまくなろうと努力してはいないなあ・・・。

運転ならまだしも教育の質は？と反省してみました。しかし，リリーベールの教員は感性豊かで，毎年刻々と変わっていく課題に気付く，その克服に知恵とアイデアを絞り，チーム力で課題に取り組んでいるのでそれはなさそうだと安心・・・。



問題は「IQ」より，課題意識に取り組む能力

この本では「IQの高さが有利に働くのは初期段階だけ」と，学習の実験結果をチェスの例をとって結論付けています。

チェスで「IQの高い子」は一般的に記憶や戦略の立案や実行が得意で最初はそれが物をいいますが，「IQの低い子」は追いつこうとたくさんの練習をしてその習慣も身に付け，やがて，それほど頑張らなくともプレッシャーを感じなかった「IQの高い子」を抜いていくといいます。

ノーベル賞受賞者の「IQ平均」が意外と高くないことは（といっても120以上ですが）知らない方が多いことでしょう。ノーベル賞物理学者リチャード・ファインマンのIQは，126で，人口2%の高知能者の国際組織メンサ（IQ132が足切りラインといわれる。）には入る事はできませんが，今世紀最高の物理学者の一人です。

IQが問題ではないことはIQ神話にとらわれている人には反省になることと思います。



学力の肝は「IQ」より，課題意識に取り組む能力

好奇心や探究心，それを持続し続ける力にはモチベーションが大切で，脳は今までに出会ったことの無いサプライズ（感動体験）に出会ったときに活発に活動し，それにより心地よい負荷がかかることで思考力や，発想力そして「やりぬく力」の回路も強化されるといいます（やりぬく脳の鍛え方・茂木健一郎・学研出版）。



幼少期は「わくわく!どきどき!じわっ!面白い!不思議だ!悲しい!嬉しい!」という感動を伴う実体験を多く経験させ脳の器を大きくすることが重要であると思います。

Principal Correspondence

「上には上がいる」と知ることはモチベーションに

「上には上がいる」という体験

アメリカ大統領のビル・クリントンが大統領を志すきっかけになったのは、故・ケネディ大統領に面会した感動からという記事を読んだことがあります。よく、英語を習っていてもさっぱり上達しなかったのに、実際に外国人と楽しそうにコミュニケーションを交わしている同級生を見て「すごい!」「楽しそう!」と強い感動と、衝撃を受けてやりぬく欲求が育ち、ぐんぐん上達するという子をみます。「上には上がいる」という体験は成長のモチベーションです。



学力とは、IQではなく「課題に粘り強く取り組む力・強いモチベーション」あるいはそれを持続する「習慣」

幼い子どもたちにそれを維持させるのは容易ではありません。

ここで、親の協力も大事です。

習い事を始めてすぐに、辛いから、上達しないからとやめてしまうのは考えもの。始めたからには「卒業まで続ける」、せめて「年度末まで続ける」というように、区切りをつけ約束して頑張らせましょう。

いやだからといって次から次へと習い事を渡り歩くことは禁物です。

子どもは右肩上がりには伸びるのではなく、成長期と停滞期を繰り返して階段をのぼるように伸びていくものです。停滞期に簡単にやめてしまつては成長したときの達成感を味わうことはできません。達成感を味わう事無しに自信や自己肯定感は育ちません。

また、友と共に競い合い、助け合い、教え合い、学ぶ経験を持つ事は大切です。大人でも、良き仲間や協力者無しに、目標に向かって努力を続ける事はかなり難しいものです。

偉人伝や伝記は「上には上がいる」事を知る良い機会

育脳学童では多くの偉人伝を揃えており、毎年、偉人伝感想文コンテストをやっています。偉人と呼ばれる人々が困難や極限の状態を勇気と知恵で克服し、成し遂げる経験を追体験することは大きな感動とともに、きっと子どもたちの人生に良い影響を与えるものと思います。

